

Dörte Döpfer 先生の講習から

3 月に帯広で開催された護蹄研究会主催セミナーでは、ドルテ・ドーファー先生より、乳牛の蹄病について非常に実践的なお話がありました。今回はその内容を、現場で役立つポイントに絞ってご紹介します。



牛は「外側の蹄」に負担がかかる動物

牛が歩く様子をよく見ると、後ろ足は前足の踏んだ位置より少し前に出て、外側の蹄から先に地面につきます。そのため、後肢では特に外側の蹄に大きな負担がかかっています。実際に後ろから見ると、外側の蹄の方が広く大きくできており、もともと体重を多く支える構造になっています。この「外側に負担が集中する」という特徴は、蹄病を考えるうえで非常に重要です。

削蹄は「きれいにする」ためではない

セミナーの中で特に強調されていたのが、削蹄の目的についてでした。見た目を整えようとして、蹄の外側を削りすぎてしまうと、本来その部分が受けていた負担が別の弱い場所に集中してしまいます。その結果、白帯（白線）と呼ばれる弱い部分（バインド）が傷み（離開・分離し）、白帯病や膿瘍の原因になります。特に注意が必要なのが、踵の高さを低くしすぎることや、外側の蹄壁を削りすぎることです。大切なのはどこを削るかではなく、どこを残すかという考え方です。牛が無理なく立ち、まっすぐ体重を支えられる状態を作ることが、良い削蹄につながります。時に農家が削蹄師に対してより多く削切するように要望することが“過削”を促進させることがあるので、要注意です。

床環境は蹄病に大きく関係する

蹄病は削蹄だけで決まるものではありません。コンクリートが荒れていたり、段差や欠けた部分があると、蹄に強い負担がかかります。コンクリートの摩耗により、溝の幅が2cmを超えると問題です[右は、農場訪問の際に目地の幅を指で測定する D 先生]。特に外蹄では、歩くたびにねじれるような力がかかり、内部で打撲が起こりやすくなります。そのダメージはすぐに表面へ出るわけではなく、1 か月ほど経ってから蹄底潰瘍として現れることがあります。また、牛が急いで動いたり、滑ったり、無理に方向転換したりすることでも蹄への負担は大きくなります。そのため、



- ・床をできるだけ滑りにくくする [1m 幅のスリップ痕は要注意]
 - ・段差を減らす
 - ・牛を落ち着いて動かす（従業員や作業者は皆で取り組む必要があります）
- といった日常管理も、蹄病予防では非常に重要になります。



白帯病（膿瘍形成）は突然できるわけではないが、離開は突然起こりうる

白帯病は、いきなり膿がたまる病気ではありません。まず白帯部分に小さな出血が起こり、その後に分離が起き、最終的に細菌が入り込んで膿瘍になります。

つまり、「出血 → 分離 → 膿瘍」という流れで進行します。

初期の小さな出血や変色を見逃さないことが、重症化を防ぐために大切です。

DD（趾皮膚炎）は早期発見が重要

近年、多くの農場で問題となっているのが DD です。DD はトレポネーマという螺旋型の細菌感染による皮膚病ですが、それだけでなく、牛舎環境や牛の体質も大きく関係しています。特に、赤くただれた状態の「M2」と呼ばれる急性期の段階で見つけられるかどうかで重要で、この時期に対応できれば治療しやすくなります。逆に、放置して慢性化すると、イボのように盛り上がった病変になり、治療が難しくなります。また、DD が続くと、かかとの形が崩れ、他の蹄病も増えやすくなります。小さいうちに見つけることが最も大切である、という点が繰り返し強調されていました。

強い薬や過度な処置には注意

DD では、強い薬を何度も使ったり、病変を削りすぎたりすると、かえって悪化することがあります。特にナイフで深く削って出血させてしまうと、炎症が強まり、治りにくくなる場合があります。病変だけを見るのではなく、蹄全体のバランスを整え、負担を減らすことが重要です。

「病気だけ」を見るのではなく、「牛全体」を見る

セミナー全体を通して、「蹄病は単独では起きない」という考え方は印象的でした。

白線病、蹄底潰瘍、DD などは、それぞれ別々に見えても、

- ・床環境
- ・牛の歩き方
- ・体重のかかり方
- ・ストレス
- ・削蹄方法

といった要因が複雑に重なって発生しています。

そのため、単に病気を治療するだけでなく、なぜこの牛に負担がかかったのか



を考えることが重要になります。

最後に、今回のセミナーでは、削蹄は単に削る作業ではなく、牛が安全に体重を支えられる状態を作るための管理であるという点が繰り返し強調されていました。

蹄病対策では、

- ・ 削りすぎないこと
- ・ 小さな変化を見逃さないこと
- ・ 床環境を整えること
- ・ 牛を落ち着いて動かすこと

が非常に大切です。

日々の小さな管理の積み重ねが、跛行予防や生産性向上につながります。今回のセミナー内容が、今後の蹄管理の参考になれば幸いです。

望月